

評論の文章を

どう 教えるか

二十四年度版教科書では、説明文教材として「記録」「評論」「論説」など、多様な文種を扱っています。

今回はその中でも、特に評論に焦点を当て、どのような授業が考えられるか、また評論を指導するときに大事なことは何かを考えます。

撮影：永野雅子



授業レポート

単元名

評論を読む

使用教材：「君は『最後の晩餐^{ばんさん}』を知っているか」（二年）

お茶の水女子大学附属中学校教諭

宗我部義則

× 二年生（三十五名）

二年一学期には「君は『最後の晩餐』を知っているか」という、美術に関する評論の文章が位置づけられています。

この新教材を使って、宗我部先生が魅力的な授業をしてくださいました。その模様（全六時間）をご紹介します。※学習指導計画はP6に掲載。

第1時

どちらが修復後？

〈教材文への導入〉〈学習のねらいの確認〉

「みんなはこの絵を知っていますか？」

宗我部先生はそう言って、レオナルド・

ダ・ヴィンチの「最後の晩餐」をプロジェクトで大きく映し出した。インパクトのある問いかけに、生徒の視線がスクリーンに集まる。

「知ってますー」「ダ・ヴィンチだね。」最近、美術でこの絵を学習したばかりの生徒たちは自信たっぷりに答える。

「では、みんなが美術の時間に見た絵は、これでしたか？ それともこっちでし

たか？」先生はそう言いながら、修復前と修復後の「最後の晩餐」をそれぞれ映し出す。とたんに教室がざわめき出した。「えーっ、どっちだろう」「色が違うよね」「わかんなくなってきた……」。

「これから、『君は『最後の晩餐』を知っているか』という文章をみんなで読んでいきます。『最後の晩餐』は今から五百年ほど前に描かれた絵で、これまでにたくさ

▶「最後の晩餐」をプロジェクタで映し、「この絵を知っていますか」と投げかける宗我部先生。



◀「修復後はどっちかな」。カラープリントを見ながら、グループで話し合う。

んの人々が修復作業を行ってきました。そして、いちばん大きな修復が一九九五年に終わったんです。どちらかがその前の絵で、どちらかがその後の絵。どちらが修復後だろうね。みんなで話し合ってみましょう。先生は修復前と修復後の絵がカラーで掲載されたプリントを配布して、グループで話し合させた。「うーん、どっちかな」「色の薄いほうが修復後じゃない?」「私は色の濃いほうが修復後だと思う。修復で色を薄くするってことはありえないでしょ」「汚れを落としていたら色がはげちゃったのかもよ」。さまざまな意見が飛び交う。

生徒たちの意見をひと通り発表させた後、先生はこう切り出した。「さあ、謎が深まってきたところで、『君は「最後の晩餐」を知っているか?」の学習に入りたいと思います。これは評論の文章です。では、まず『評論』という言葉を書き出して調べてみましょう」。

そして先生は、辞書を引いた生徒の言葉を受けて、「評論：物事の価値や善し悪しについて話し論ずること。その文章。」と板書。さらに、「何が読めれば『評論を読めた』ということになるだろう」と問いかけた。グループで話し合った生徒たちから、「筆者が言いたいことを理解する」「筆者の考えに対して、自分の意見をもつ」などの意見が出された。

先生は「評論を読む楽しさ、よさを見つけていってほしい」と話し、次のように板書した。

〈評論を読む楽しさ、よさ〉

- ・物事について知る
- ・筆者の見方・考え方にふれる
- ・筆者の論じ方
- ・その物事や筆者の見方について自分も考える

「それでは、みなさん、お待たせしました。教科書の一二五ページを開いてください。その折り込みのページに掲載されているのが、修復後の『最後の晩餐』です。生徒からは「やっぱり!」「じゃあ、なんで薄くなっちゃったの?」などの驚きの声上がる。次時への期待感が高まったところで、授業の終わりを告げるチャイムが鳴った。

学習指導計画（全六時間）

第1時

教材文への導入

「最後の晩餐」の修復前と後の画像を提示し、関心を引き出す。

学習のねらいの確認

何が読めれば評論が読めたことになるかを話し合う。

第2時 大段落1の読み取り

「最後の晩餐」の絵について知り（作者・所在など）、筆者の絵に対する評価をキーワードで捉える。

第3時 大段落2の読み取り

「最後の晩餐」がどんな場面なのか、また「科学が生み出した新しい芸術」とは何かについて話し合う。

第4時 大段落2の読み取り

「最後の晩餐」の背景について確認し、絵を読み解く。そして、「科学が生み出した新しい芸術」とはどういうことかを話し合う。

第5時 大段落2・3の読み取り

「かっこいい」と思った理由について話し合う。

第6時 学習のまとめ

「かっこいい」と思った本当の理由について話し合う。筆者の見方について自分の考えをまとめる。

2

第2時

「ズバリ」 どう評価しよう?

〈大段落1の読み取り〉

本時からいよいよ本文の読みに入る。先生は、「最後の晩餐」を大きく掲載したワークシート（下写真）を配布。そして、生徒に大段落1を音読させた。

語句の説明などを行った後、先生はこう投げかけた。「本文に『レオナルドの絵は』とあるね。みんな、レオナルド・ダ・ヴィンチをフルネームで呼ばないとしたら、何と呼ぶかな?」。生徒たちは口をそろえて「ダ・ヴィンチ」と答える。「レオナルドって呼んだら、友達みたいで変じゃない?」。一人の生徒がぼそっとつぶやいた。「友達みたい……か、なるほどね」。

『ダ・ヴィンチ』というのは、『ヴィンチ村の』という意味らしいんですよ。だから、『レオナルド・ダ・ヴィンチ』は、『ヴィンチ村のレオナルド』という意味。私だったら、練馬区に住んでいるから、『義則・ダ・練馬区』になるのかな。先生のたえに、生徒からどっと笑いが起きる。

そして、先生はこう続けた。「筆者の布施さんは、そういうことを踏まえて、レオナルドと呼んでいるのかもしれない。または、さっき『友達みたい』と言っていた人がいたけど、親しみや尊敬の気持ちを込めているのかもしれないね」。先生は、筆者のレオナルドへの思いにさりげなくふれていく。

その後、ワークシートの「大段落1 布施さんは『最後の晩餐』をズバリどんなふうに評しているだろう」という問いについて、みんなで考えていく。

「この『ズバリ』という言葉が大事ですよ」。先生がそう投げかけると、生徒たちは、「科学が生み出した新しい芸術」「すばらしい絵」「名画」「かっこいい」という言葉を次々と挙げていった。

筆者の評価をキーワードで捉えられたところで、「『新しい芸術』や『かっこいい』って、どういうこ



国語科学習ワークシート
君は「最後の晩餐」を知っているか

2年 組 氏名
◎図と本文を読み比べ、筆者の絵に対する「読み解き」を導かよう。

「最後の晩餐」は?」

●誰が入り?」

●どこにある?」

●いつの作品?」

●大きさは?」

●どんな絵か?」

●どんなふうに評している?」

●どんなふうに評している?」

●どんなふうに評している?」

●どんなふうに評している?」

●どんなふうに評している?」

●どんなふうに評している?」

●どんなふうに評している?」

●どんなふうに評している?」

●どんなふうに評している?」

●どんなふうに評している?」

●どんなふうに評している?」

●どんなふうに評している?」

●どんなふうに評している?」

●どんなふうに評している?」

●どんなふうに評している?」

●どんなふうに評している?」

●どんなふうに評している?」

●どんなふうに評している?」

●どんなふうに評している?」

●どんなふうに評している?」

●どんなふうに評している?」

●どんなふうに評している?」

●どんなふうに評している?」

●どんなふうに評している?」

●どんなふうに評している?」

●どんなふうに評している?」

●どんなふうに評している?」

●どんなふうに評している?」

●どんなふうに評している?」

3

第3時

どんな場面の絵なのか

〈大段落2の読み取り〉

本時では、大段落2の読み取りに入る。音読し語句の説明をした後、先生はこう投げかけた。

「絵を『美しい』『きれい』と表現することはあるけど、『かつこいい』って、あまり言わないよね。筆者である布施さんは、どうして『かつこいい』と思ったんだろう。グループで話し合ってみよう」。

宗我部先生のクラスでは、グループで話し合うとき、グループの中で「進行役」を立てる。進行役は話し合いの前に、どのように進めていけばよいか、先生から指示をもらい、話し合いを仕切る役だ。今回は、次の三点について話し合うよう先生から指示が出された。

- ① 「最後の晩餐」はどんな場面を描いた絵なのか。
- ② 「科学が生み出した新しい芸術」とはどういうことか。



▲話し合いの前に、「進行役」を集めて、話し合いの進め方を伝える。



◀「遠近法」を確認するため、絵に線を書き入れる生徒。

③なぜ「かつこいい」と思ったのか。

そして、②については「遠近法」などの言葉を手がかりにまとめること、ワークシートの絵に書き込んで「遠近法」などを実際に確認してみることが告げられた。生徒たちはまず「①どんな場面か」について話し合いを始める。

生徒たちは第九段落の「裏切りがある」という予言を耳にした弟子たちが驚き、ざわめいているところ」という部分を抜き出すことができるものの、「キリストはどの人?」「なんで裏切ったんだろう」など、この絵の背景については、今ひとつピンときていない様子だ。この時間は、①と②のグループ学習で、授業が終わった。

4

第4時

ユダは誰だ!?

〈大段落2の読み取り〉

授業の冒頭では、前時に話し合ったことを発表させた。まず「①どんな場面を描いた絵か」について。生徒は「磔刑の前後で、キリストが裏切り者がいると予言し、弟子たちがざわめいている場面」と発表した。

先生は、前時で生徒たちが「最後の晩餐」の背景を理解していなかったことを受けて、「キリストはなぜ磔刑に処されることになったんだろう」と投げかけた。すると、クリスチャンだという生徒が手を挙げ、「最後の晩餐」の場面について丁寧に説明を始めた。裏切り者はユダという名前であること、王様たちに追われていたキリストの居場所を、ユダは銀貨と引き換えに教えてしまったこと……。

「ありがとう。この絵の背景がよくわかったね。この中に裏切り者のユダがいるらしい。どの人がユダか、みんな考えてみよう。実は、レオナルドは、その人物がユダだってわかるように描いているんだ」。

先生がそう投げかけると、生徒たちは「この人なんじゃない?」と、ざわめき始めた。プロジェクトで大きく映し出された「最後の晩餐」を見ながら、全員で「ユダが誰か」を考えていく。このクラスでは、どれがユダか知っている生徒(Aさん)がいたので、彼女に答えを発表する役を与えた。

●●●

生徒1「左から四番目のナイフを持っている人だと思います。キリストを殺そうとしているように見えるから」

先生「Aさん、どう?」

Aさん「残念!違います」

生徒2「右から四番目の人。『私のことですか?』という手をしている」

Aさん「残念!」

先生「でも、手に着目しているのがいいね。みんなも手の表情を見て」

生徒3「左から五番目の人。右手に何かを持っている。銀貨なんじゃないかな」

先生「Aさん、今度は?」

Aさん「はい、正解です!」

一同「おおっ!」(歓声と拍手)

先生「でもね、銀貨に注目しなくても、ユダだとわかるんだよ」

生徒4「ユダだけが、後ずさりしている」
先生「そう、彼だけがキリストから逃れるような姿勢だよ。そして、左手を驚いたように広げている。レオナルドはこうやって、ユダの感情を表したんだ。他の人物たちもいろんな感情がわかるようだね」

●●●

生徒は、人物の手に着目し、そのポーズを真似していた。レオナルドがいかに手や表情を生き生きと描いているかが実感できたようだ。

そして次に、「②科学が生み出した新しい芸術とは?」について、グループで話し合ったことを発表させた。どのグループも「解剖学」「遠近法」「明暗法」という三つのキーワードを中心に考えをまとめている。先生は、このキーワードが本文の初めのほうで、「人体の科学」「空間の科学」「光の科学」と説明されていることにも気づかせ、「新しい芸術」とは、この絵が三つの科学的な表現方法によって生まれたことを指す、とまとめた。

いよいよ次時では、なぜ筆者が「かつこいい」と思ったのかについて考え、この教材文の核心に迫っていく。

5

第5時

なぜ「かついっく」のか

〈大段落2・3の読み取り〉

「今日は、筆者がどんなところを『かついっく』と言っているのか、みんなで考えていきます」。まず自分の考えをまとめさせ、その後、グループで話し合いをさせた。そして、「かついっく」の理由について、グループごとに発表。どのグループも、解剖学などの絵画の「科学」が駆使されていること、それが修復によってよく見えるようになったことを、理由として挙げていた。しかし、そんななか、男子生徒・B君が思い詰めたようにこう話した。「……グループの意見はそうなんだけど、僕個人の意見は違うんです」。先生はすかさず「B君はどんな意見なの？」と発表を促し、そこから、授業の流れが大きく変わっていく。

B君「『かついっく』の理由は、絵画の『科学』が駆使されていることではなく、『衝撃』がやってきた」こと

6

第6時

「かついっく」を探る

〈大段落2・3の読み取り〉〈学習のまとめ〉

「さあ、いよいよ最後の授業です」。前時では、多くの生徒が「絵画の『科学』を『かついっく』の要因として挙げていた。先生は、そこに揺さぶりをかけるため、B君が「絵画の『科学』はひと目でわからないはずだ。いきなり『衝撃』がくるから『かついっく』のだ」と提起したことを振り返らせた。そして、「『かついっく』の要因として『衝撃』という言葉は入れたほうがいいのだろうか？」と投げかけた。先生のこの揺さぶりによって、生徒たちは自分の考えをさらに深化させていく。

生徒7「第四段落に、『すばらしい絵の前に立つと、衝撃がやってくる』とあります。だから、『衝撃』は、すばらしい絵に対しての言葉。『かついっく』の要因にはならないと思う」
生徒8「『衝撃』という言葉にはいろいろな意味が含まれているんじゃないか

だと思う。だって、筆者が最初にバツとこの作品を見たとき、『科学』についてはわからないはずでしょう。まず衝撃がやってきたから『かついっく』と感じたのだと思います」
先生「なるほど。このB君の意見に反論のある人はいる？」

生徒5「うーん。B君の言うとおり、最初は『科学』についてわからなかったかもしれない。でも、理由を突き詰めていった結果、『科学』がわかったわけだから、やはり『かついっく』の要因だと思います」

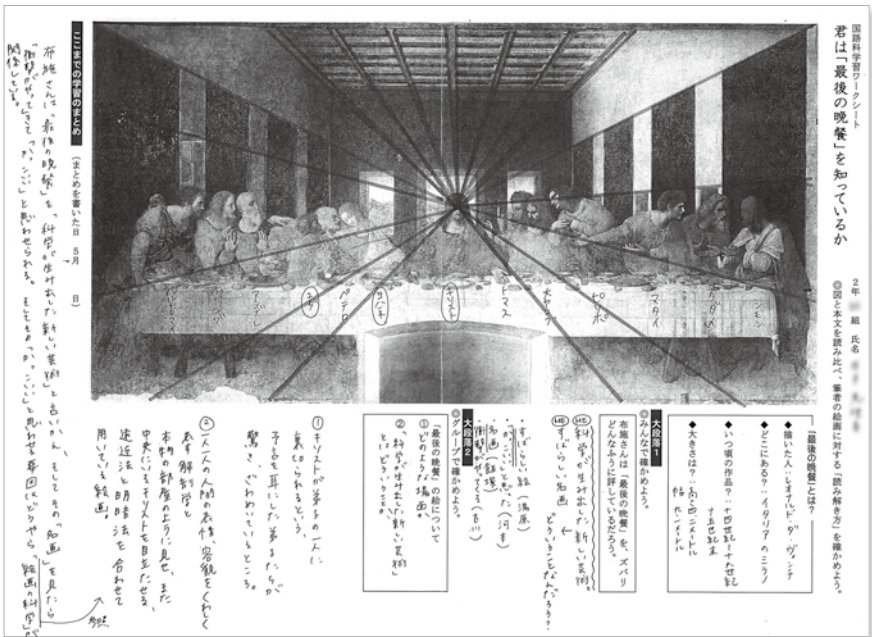
生徒6「第十六段落に、絵画の科学を目のあたりにできることが『かついっく』の一つの要因として書いてあるでしょう。だから、『科学』は要因なんだと思います」

な。B君が言ったように、ひと目見て『科学』の理屈はわからないけど、『科学』は、迫力や衝撃を与える大きな要素になっていると思う。だから『衝撃』という言葉は入れておいたほうがいいと思う」

先生「なるほど。迫力や衝撃を生むものになっているのが、『科学』だということか。なかなか鋭い意見だね」

生徒9「そういう迫力を計算して描いているから『かついっく』んじゃないかな」

「衝撃」という言葉について考えるなかで、生徒たちは「かついっく」の要因として「見た瞬間に衝撃を受ける絵だから」



▲生徒はワークシートに書き込みながら、教材文の理解を深めていった。

意見がぶつかり、盛り上がりを見せるなか、終業のチャイムが鳴る。先生は「おもしろくなってきたね。次の時間では『かついっく』の一番の理由がどこにあるのか、探っていきましょう」と締めくくった。

「科学を知らない人も迫力を感じることが出来る絵だから」「今までにない、新しい絵だから」という意見を出すようになっていく。授業はどんどん盛り上がっていった。そこで、先生は改めて、筆者が「かついっく」と思った理由について、各自で意見をまとめさせ、何名かに発表させた。ある生徒は、「『科学』を駆使した今まで誰も描かなかった絵であること。そして『科学』を知らなくても、いきなり迫力と衝撃を感じる事ができる絵であること。それを、布施さんは『かついっく』と感じていると思います」と発表した。なかには、「（先見性のある）レオナルドが『かついっく』と発表する生徒もおり、『かついっく』の要因を自分なりに深めることができたようだ。

そして、さらに「布施さんの評論について自分はどう思うか」「評論を読むコツは何か」についてそれぞれまとめることを宿題として、授業は終わりの時間を迎える。「今日はすばらしい発言がたくさん出ました。私は、それこそ『かついっく！』と思いましたよ。では、これで「君は『最後の晩餐』を知っているか」の授業を終わりにします」。先生は笑顔で授業を締めくくった。



生徒のノートより

宗我部先生は、授業の最後に、「筆者の評論に対する自分の考え」「評論を読むコツ」をノートにまとめるよう課題を出しました。生徒のノートから、その一部をご紹介します。

「筆者の評論に対する自分の考え」

布施さんは、まず第四段落で、「すばらしい絵の前に立つと、理屈ではなく、まず衝撃がやってくる」と言っている。私はそれに共感する。私はまだ衝撃を感じたことはないけど、もしすばらしい絵を見たら、細かく「ここがすばらしい」というのではなく、その絵との「運命的な出会い」のようなものを直感的に感じると思う。

しかし、布施さんは、第二十段落で「絵が完成したばかりのころは、細部の描き込みのすこし目を奪われて、この絵がもっている本当の魅力が『見えなかった』』と言っている。私はそれとは違う意見だ。本当の魅力はその細部にもあるのではないかと考えるからだ。(Mさん)

布施さんの「科学が生み出した新しい芸術」という評し方について、僕も共感できる。遠近法など、その絵を見たときに引き付けられる要素がたくさんつまっていると思った。今の時代になっても、すごい絵だと思われているのだから、当時は、さらに新しく感じられ、たくさんの人を驚かせたと思う。

もう一つ、「かっこいい」という考えに対して、僕は実際にその絵を見たわけではないから、見た瞬間にどう思うかはわからない。でも、やはり布施さんのように「かっこいい」とか「心が大きく動かされる絵」という考えをもつと思う。この文章を読んで、イタリアで本物を見てみたいと思った。(T君)

「評論を読むコツ」

生徒たちから、さまざまな「コツ」が出されました。抜粋してご紹介します。繰り返し出てくる言葉に注意する

この文章では「かっこいい」という言葉がたくさん出てきます。たくさん出てくるということは、それだけ重要ということなので、その言葉のまわりに注意すると思いました。(Sさん)

自分の考えをもつ

筆者の言いたいことがわかったら、それに対して自分の考えをもつ。それで、初めて評論が読めたことになると思います。(M君)

その絵（評論の対象）について知る

この文章は絵についてまったく知らないで、理解ができません。まず絵のことを知っておくべきだと思います。(Tさん)

接続詞に注意する

「だから」「このように」は、筆者の考えや伝えたいことがまとめてあることが多い。「だが」「しかし」は強調させたいことが書いてあることが多いと思います。(Tさん)

授業を終えて

導入が鍵になる

この教材は、とても魅力的な文章です。しかし、生徒にとっては、すんなり読める内容ではありません。ですから、授業の導入で、いかに生徒たちの心を捉えるかが鍵になると思いました。

生徒は、すでに美術の授業で「最後の晚餐」を学習していました。彼らに「君は『最後の晚餐』を知っているか」と尋ねたら、絶対に「知ってる!」と答えるでしょう。だから、それを覆して驚かせようと思いました。修復前と後の絵を見せて、「どっちが修復後?」という導入をしました。第一時で生徒を引き付けることができたからこそ、読む必然性が生まれ、最終時まで集中して授業を行うことができたと思っています。

何を読み取らせるか

私が教材研究をするとき、いちばん大事にしているのは「何が読めたら、この文章を読めたことになるだろう」ということで

す。この教材では「筆者は何を『かっこいい』と評しているか」が読めればいいと考えました。

「科学的な手法を使っていること」が、「かっこいい」のではなく、「科学的な手法を使って、誰も描かなかった新しい絵を生み出したこと」が「かっこいい」。そして、「細部が見えなくなってしまうのに、見た瞬間にすこさが伝わってくること」が「かっこいい」。そういうことを生徒に読み取らせたいと考えました。そこに気づかせるには、「まず衝撃がやってくる」「目のあたりにできる」「いきなり『かっこいい。』……これらの表現がポイントになります。授業をしたクラスでは、B君が「いきなり『衝撃』がくるから『かっこいい』のだ」と言ったことをきっかけに、話し合いが深まり、核心に迫ることができました。

筆者の見方を追体験させる

評論は、ある対象についてその人の考えが書いてある文章です。私は、評論を読むとき、まず筆者の立ち位置になるべく近づいて、対象となるものを見る必要があると考えています。今回は、布施さんが感じた

ことを生徒たちに追体験させるべく、絵を読むために丸一時間とりました。文章と照らし合わせながら、絵に書き込みをしたり、手のポーズを真似たりすることで、この絵のすばらしさを実感させました。そうやって布施さんの見方を体感させたいうえで、最後に「布施さんの考えについて自分はどう思うか」という課題を出しました。評論の授業では「筆者の考え」を読み取らせるだけでなく、「筆者の考えについて自分はどう思うか」というところまで、考えさせなければならぬと思うからです。

とにかく、この教材は教えていてとても楽しかった。布施さんの文章も魅力的ですし、レオナルドの作品のすばらしさもあるでしょう。今回は、読みを中心に授業をしました。今度は「鑑賞文を書く」という、「書くこと」と組み合わせたい授業もしてみたいと思います。(談)



宗我部義則

1962年埼玉県生まれ。お茶の水女子大学附属中学校教諭。お茶の水女子大学非常勤講師。国立教育政策研究所「教育課程実施状況調査問題(中学校国語)」作成および分析委員。平成20年告示中学校学習指導要領解説国語編作成協力者。編著書に「群読の発表指導・細案」(明治図書出版)など。光村図書中学校「国語」教科書編集委員を務める。

絵を鑑賞したっていい

書き手の個性を意識する

生徒の知的好奇心をくすぐる

まず、導人が大胆でとてもよいと思いました。生徒たちの興味づけが実にうまい。もしかしたら、国語の先生の中には、授業で絵を扱うことについて、躊躇^{ちゅうちよ}される方もいるかもしれません。しかし、内容を深く理解するために、評論の対象となるもの（ここでは絵画）を、読み解く時間も大事です。生徒たちの興味を引き付けることができ、最終的に言葉の問題に着地することができるのなら、絵画をじっくり鑑賞する時間があってもいいと、私は思います。宗我部先生は、授業の前に美術の先生と打ち合わせをしたそうです。美術の時間では「最後の晚餐」をどう扱ったのか、そのときの生徒の反応はどうだったかなどをリサーチし、それを授業に生かしていった。そうやって、他教科の先生と連携することは大事です。説明文教材では、理科や社会の先生と連携することもできるでしょう。教科の枠を超えて情報交換し、補完し合うことができれば、生徒にとってよりよい授業が展開できるはずです。

また、宗我部先生は、ふつう私たちが「ダ・ヴィンチ」と呼ぶところを、筆者があえて「レオナルド」と呼んでいることに着目させています。こうやって書き手の個性が表れている部分をきちんと拾い上げて、生徒に考えさせているところもいい。筆者である布施さんの文体は、非常に独特で魅力的です。絵画を評するのに「すばらしい」や「美しい」ではなく、「かつこいい」という、あえて表層的にも聞こえる言葉を使っている点や、「レオナルドが描きたかったのは『それ』なのだ」などのやや持つて回った表現をする点も魅力的です。生徒たちには、ぜひこういった文章を読む味わいを感じてほしいですね。

二十四年度版教科書には、書き手の個性が見える説明文教材が多く位置づけられました。例えば、「シカの『落ち穂拾い』」（一年）では、研究の過程が図表とともに具体的に書かれており、筆者といっしょに、研究の過程を体験していくような感覚になれるでしょう。また、「ネット時代のコベ



たかぎ 高木まさき

1958年静岡県生まれ。横浜国立大学教授。中央教育審議会国語専門部会委員、全国的な学力調査の実施方法等に関する専門家検討会議委員などを歴任する。著書に『「他者」を発見する国語の授業』（大修館書店）、『合科的・総合的な学習のための読書関連単元100のプラン集』（共編著 東洋館出版社）など。光村図書小学校・中学校「国語」教科書編集委員を務める。

「君は『最後の晚餐』を知っているか」参考図書のご紹介

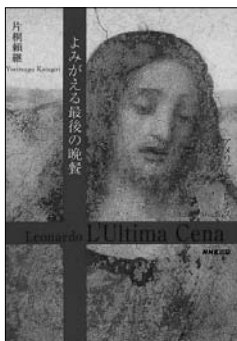
教材研究に役立つ書籍をご紹介します。

「最後の晚餐」について知る



レオナルド・ダ・ヴィンチ
復活「最後の晚餐」
(片桐頼継／小学館)

世界中が注目した「最後の晚餐」の修復。その意図や過程を、写真と丁寧な解説でまとめている。修復によりこの作品がどう生まれ変わったのか、つぶさに見ることができる1冊。



よみがえる
最後の晚餐
(片桐頼継 アメリア・アレナス／NHK出版)

NHKで放映された同名のテレビ番組の解説版。CGを駆使して見事によみがえった「最後の晚餐」は圧巻だ。残念ながら本書は絶版のため、図書館で閲覧、または古書店で購入されたい。



pen BOOKS 015
キリスト教とは何か。I
(池上英洋 監修／阪急コミュニケーションズ)

「最後の晚餐」を理解するためには、キリスト教の基礎知識が欠かせない。本書では、聖書の概略や、聖書の場面が西洋美術にどう描かれているのかが、わかりやすく解説されている。

◎筆者のものの見方や考え方にふれる



美の方程式
美＝完璧×破れ
(布施英利／講談社)

パルテノン神殿、モナ・リザ、グッゲンハイム美術館……これらがなぜ美しく見え、多くの人々を魅了してきたのか？ 美の謎、美に潜む方程式を、布施氏が解き明かしていく。



はじまりは
ダ・ヴィンチから
(布施英利／エクスナレッジ)

ダ・ヴィンチに始まり、ピカソ、雪舟、そして横尾忠則らの現代作家に至るまで、古今東西の作家50人を、独特の視点で分析していく。布施氏の作家や作品の見方を知ることができる1冊。



脳の中の美術館
(布施英利／筑摩書房)

人体の視覚形式を、「見る」に徹する「目の視覚」と、共通感覚に訴える「脳の視覚」の2種類に分け、写真・映画・マンガ・美術作品など、古今東西の視覚作品を布施氏が解剖していく。